

平安京右京五条三坊八町跡・西院城跡 (小泉城) 発掘調査報告書

2025年

特定非営利活動法人平安京調査会

平安京右京五条三坊八町跡・西院城跡 (小泉城) 発掘調査報告書

2025年

特定非営利活動法人平安京調査会

例 言

- 1 本書は京都市右京区西院巽町 22 番地で実施した、平安京右京五条三坊八町跡・西院城跡(小泉城)の遺跡発掘調査報告書である。(京都市番号 24H256)
- 2 調査は共同住宅新築工事に伴い実施した。
- 3 現地調査は新都市企画株式会社から、特定非営利活動法人平安京調査会(以下、「平安京調査会」という)に委託され、吉崎 伸が担当した。
- 4 調査期間は令和 6 年 11 月 18 日から 12 月 17 日である。
- 5 面積は 180m²である。
- 6 本文、図中で使用した調査位置図は京都市発行の都市計画基本図(縮尺 1: 2,500)「山ノ内」を調整して使用した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆・編集は吉崎 伸が行った。
- 10 現地の記録写真撮影は吉崎 伸が行い、出土遺物の撮影は九鬼みづほが行った。
- 11 調査にかかる資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は以下のとおりである。
〔発掘調査〕吉崎 伸(平安京調査会)
作業員 岸波敏明、川名貴樹、坪内孝二、小西 敏、土肥正照、多田光利、
酒井 真、九鬼みづほ
〔整理作業〕株式会社コンピュータ・システム、平尾政幸、岸波敏明
- 13 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 年による。
- 14 本調査の検証審査員は鈴木久男 京都産業大学客員教授である。
- 15 発掘調査、整理作業において、下記の方からご指示ご指導をいただいた。記して感謝いたします。

(敬称略) 南 孝雄(公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所)

目 次

第Ⅰ章	調査の経緯	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査経過	1
第Ⅱ章	遺跡	4
1	歴史的環境	4
2	周辺の調査	5
第Ⅲ章	遺構	6
1	基本層序	6
2	第1面の遺構	6
3	第2面の遺構	6
4	第3面の遺構	14
第Ⅳ章	遺物	15
1	土器類	15
2	瓦類	17
3	土製品	17
4	木製品	17
5	石製品	17
6	金属製品	17
第Ⅴ章	まとめ	19
1	近世の遺構	19
2	室町時代の遺構	19
3	平安時代から鎌倉時代の遺構	20

図 版 目 次

図版 1	遺構 1. 第1面オルソ画像(俯瞰)
図版 2	遺構 1. 第2面オルソ画像(俯瞰)

- 図版 3 遺構 1. 第3面オルソ画像(俯瞰)
2. 1区第1面全景(西から)
- 図版 4 遺構 1. 1区第2面全景(西から)
2. 建物1(南から)
- 図版 5 遺構 1. 建物1 柱穴324と278(南から)
2. 建物2 柱穴354断面(北から)
3. 建物1 柱穴258断面(東から)
- 図版 6 遺構 1. 建物2(東から)
2. 土坑352(北から)
3. 溝101a～c(南から)
- 図版 7 遺構 1. 2区第1・2面全景(西から)
2. 溝501(北東から)
- 図版 8 遺構 1. 落込502(北から)
2. 1区第3面宇多小路関連遺構群(北から)
- 図版 9 遺物(土器類)
1. 溝501出土土器
- 図版 10 遺物(土器類)
1. 溝501出土土器
2. 各遺構出土土器
- 図版 11 遺物(瓦・木製品・土製品・石製品・金属製品)
1. 瓦・木製品・土製品・石製品・金属製品

挿 図 目 次

図 1	調査位置図(1:5,000)	1
図 2	調査区配置図(1:400)	2
図 3	調査経過写真	3
図 4	北壁・西壁断面図(1:100)	7
図 5	第1面平面図(1:100)	8
図 6	第2面平面図(1:100)	9

図 7	第 3 面平面図(1 : 100)	10
図 8	建物 1 実測図(1 : 80)	11
図 9	建物 2 実測図(1 : 80)	12
図 10	溝 501 実測図(1 : 80)	13
図 11	土坑 352 実測図(1 : 80)	14
図 12	遺物実測図(1 : 4)、銭貨拓影(1 : 2)	16
図 13	上杉本洛中洛外図屏風(さいのしろ部分)	19

表 目 次

表 1	遺構概要表	6
表 2	遺物概要表	18

第Ⅰ章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯（図1）

調査地は京都市右京区西院巽町22番地に所在し、平安京右京五条三坊八町跡・西院城跡（小泉城）に該当している。ここで共同住宅建設計画が持ち上がったため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を行ったところ、中世から近世の溝、柱穴、土坑などが検出されたため、土地の所有者である新都市企画株式会社に発掘調査の指導がなされた。指導を受けた新都市企画株式会社は特定非営利活動法人平安京調査会に調査を委託し、委託を受けた平安京調査会が担当して発掘調査を行った。

2. 調査経過（図2）

調査は2024年11月18日より準備工、調査区の設定から開始した。調査区は敷地の北寄りに東西20m、南北6m、さらに南西側に東西10m、南北6mが付属するかぎ型の調査区180㎡を設定した。遺構面の深さから予想される掘削土量を勘案した結果、排土が場内に置ききれないことが予想されたため、最初に北側の東西20m、南北6mの120㎡を1区として調査し、終了後、反転して南側の東西10m、南北6mの60㎡を2区として調査を行うことにした。1区の調査は11月18日に重機掘削を行い、同日より第1面の遺構検出を開始した。第1面では主に近世の土坑群を検出した。11月25日からは掘り下げを行い第2面の調査に移行した。第2面では中世

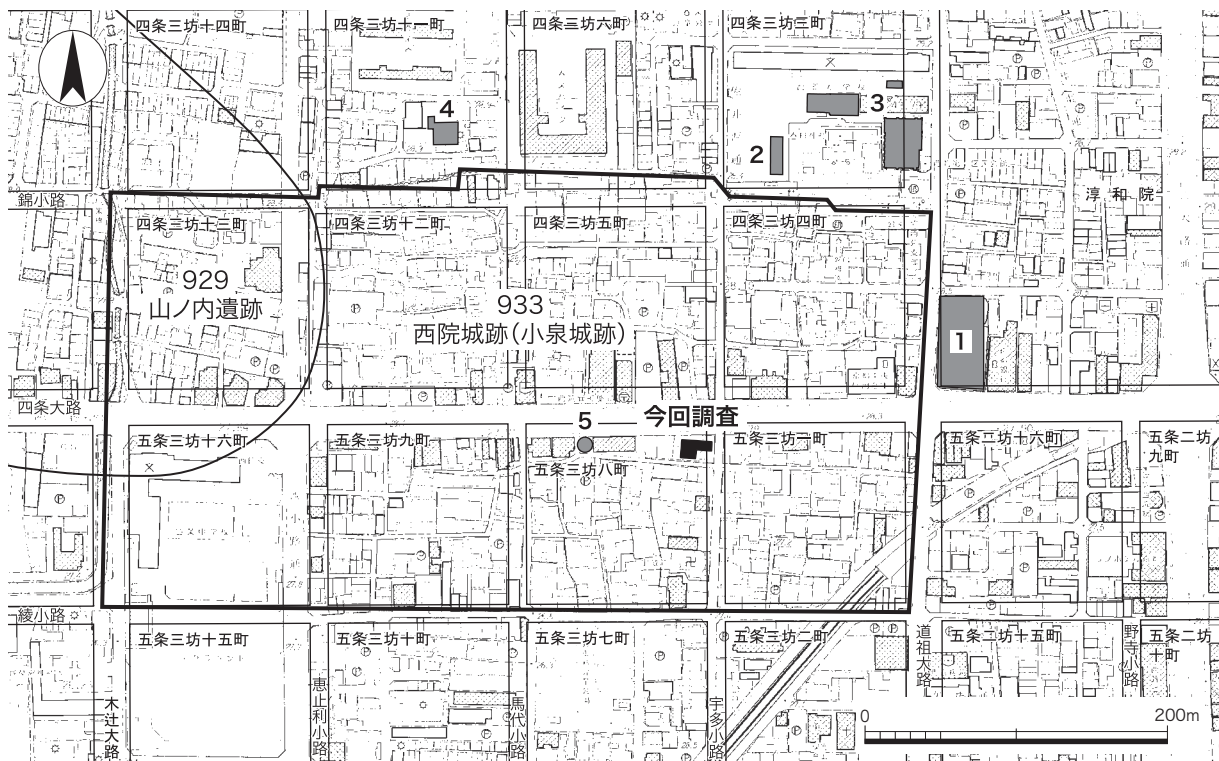


図1 調査位置図(1:5,000)

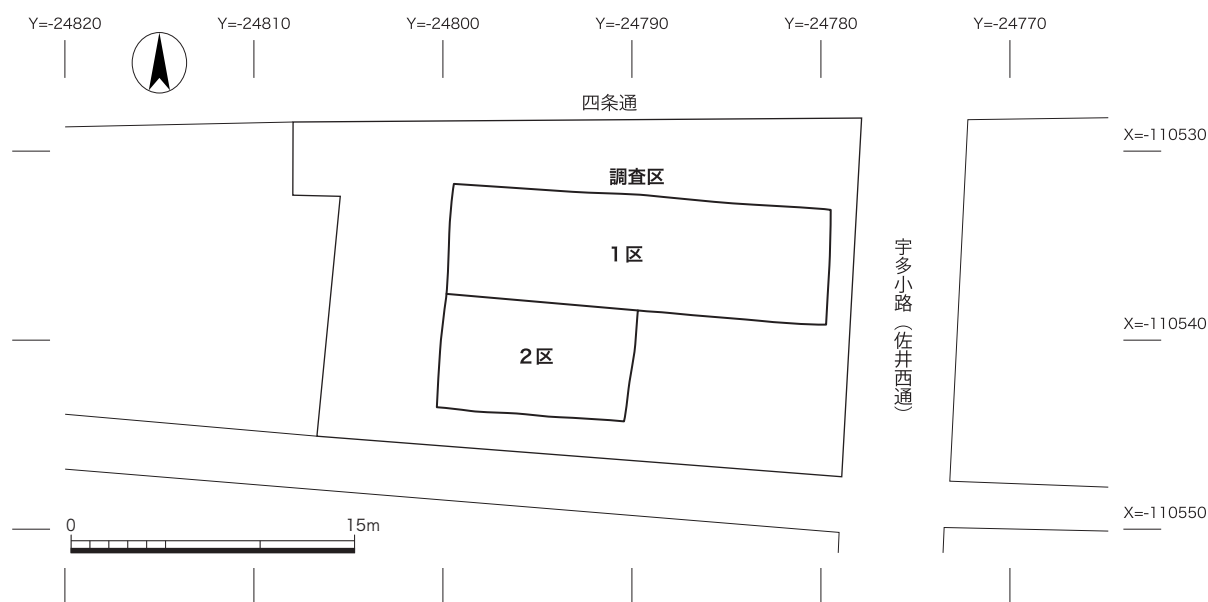


図2 調査区配置図(1:400)

を主体とした多数の柱穴を検出した。柱穴の並びを検討した結果、室町時代後期の掘立柱建物であることが分かった。調査区の東部では平安時代から鎌倉時代の宇多小路の西側溝や八町側の内溝を検出した。12月6日には1区の調査を終え、7日から2区の調査にかかった。2区では調査区の全体に近世の土坑が広がっており、第1面と第2面の識別が困難なため2面からの調査とした。2区では全域で近世の土坑群、調査区の南側で室町時代後期の東西方向の石積溝を検出した。12月16日には2区の調査を終え、17日に埋め戻しを行いすべての調査を終了した。

この間、調査中は随時、文化財保護課の検査・指導を受け、検証審査委員である鈴木久男 京都産業大学客員教授の審査を受けた。



1. 調査区設定



2. 重機掘削



3. 遺構掘削作業



4. 文化財保護課の検査



5. ドローンによる3D計測



6. 検証審査委員の審査



7. 埋め戻し



8. 調査終了状況

図3 調査経過写真

第Ⅱ章 遺跡

1. 歴史的環境

前述のごとく調査地は平安京右京五条三坊八町跡・西院城跡に推定されている。

『拾芥沙』西京図には平安京右京五条三坊八町に「前帥堂」と「邦恒堂」が併記されている。この二つは同じ御堂で前師は平安時代後期の太宰権帥藤原季仲、邦恒はその外祖父の藤原邦恒のことである。邦恒は関白藤原頼通の家司として頭角を現し、興福寺や法性寺の再建に尽力した。この地に建立した持仏堂「邦恒堂」には、仏師定朝の作による丈六阿弥陀仏を収めていた。この仏堂と安置された阿弥陀仏は平安貴族の間でも評価が高かったようで、『春記』天喜二年（1054）五月三日条には仏堂の壮麗さが驚嘆されたことが、『長秋記』には阿弥陀仏について「天下これを以て仏本様と為す」「その金鉢まことに真像に向かうがごとし」と称賛されたことが記されている。また、『中右記』嘉承元年（1106）十月二十七条には、この御堂で祐子内親王（後朱雀天皇皇女）の法要が行われたことが記されている。

一方、西院城は小泉城とも呼ばれ、当初は西院小泉の荘を基盤とした小泉氏によって築かれた。天正年間に三好長慶が細川晴元に対抗するため、洛中の押さえとしてこの城を改修して、小泉秀清を城主とした。『言継卿記』天文十九年（1550）四月十七日の条には細川晴元が西院城を攻めた様相が記されている。また、天文二十二年（1553）七月三十日の条には東山靈山城の戦いで細川晴元側の内藤彦七が山城小泉城（西院城）を攻めた記事が認められる。また、『足利季世記』永禄九年（1568）の記載に三好長慶の没後、松永久秀と三好三人衆の争いの際、西院城は落城したことが記されている。さらに、『言継卿記』の永禄十一年九月二十四日の条に記された内容からは、織田信長上洛の際には一戦も交えることなく城を自焼し、兵を引いたことが読みとれる。なお『上杉本 洛中洛外図屏風』の左隻第六扇に描かれた「さいのしろ」との注記がついた城館が西院城を示すものと考えられている。

近世の『山城名勝志』には土塁や堀の跡が少しばかり残っていることが記されており、このころには周辺は農地となっていたようである。

【参考文献】 国際日本文化研究センター『撰関期古記録データベース』

(<https://rakusai.nichibun.ac.jp/kokiroku/>)

2. 周辺の調査（図1）

ここでは西院城跡を中心にその周辺で行われた主な調査を概観する。

淳和院跡・右京四条二坊十三町跡 当地は淳和天皇の離宮（淳和院）の一部と推定されている。平成4年度に行われた調査（図1－1）（註1）では、平安時代の遺構が「6段階」にわたって多数検出されている。とくに「第2段階」の遺構は淳和院に関するものと考えられ、大型の掘立柱建物、門、道路遺構が確認されている。

右京四条三坊三町跡 京都市立西院小学校構内では令和元年度の調査（図1－2）（註2）で平安時代前期の土坑、平安時代後期から鎌倉時代の柵や溝、室町時代の溝、江戸時代の建物などが検出されている。令和2～3年に実施された調査（図1－3）（註3）では奈良時代から室町時代の遺構が検出されており、とくに平安時代前期から中期の道祖大路とその路面に開削された道祖川の変遷が明らかになっている。さらに道祖川が埋没した後の平安時代後期から鎌倉時代にかけては大型の掘立柱建物を含む多くの建物が検出されており、右京域に展開する荘園「小泉荘」を管理する「荘家」と推定している。

右京四条三坊十一町跡 平成25年の調査（図1－4）（註4）では平安時代前期の建物や柵が2時期にわたって検出されている。

右京五条三坊八町跡 平成3年度の立会調査（図1－5）（註5）では鎌倉時代の土坑を検出、土師器、軒平瓦などが出土している。

この周辺は比較的発掘調査事例の少ない地域で、とくに西院城跡に関する明確な遺構はこれまでに発見されていない。

註1 関西文化財調査会『淳和院跡発掘調査報告書 平安京右京四条二坊』1997年

註2 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京四条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2019－5 2019年

註3 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所『平安京右京四条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2021－10 2022年

註4 財団法人 京都埋蔵文化財研究所『平安京右京四条三坊十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2013－1 2013年

註5 京都市文化観光局 「平安京右京五条三坊(91HR31)」『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度

第Ⅲ章 遺構

1. 基本層序（図4）

調査前の当地は駐車場の跡地で更地となっていた。地表面の標高は敷地の北側で 27.50m、南側にゆるく傾斜する地形であった。

調査区の基本層序は、上から現代盛土 0.5m、オリーブ褐色泥砂層（2.5Y4/3：1 層） 0.3m、暗褐色泥砂層（10YR3/3：12 層） 0.3m、黄灰色砂泥層（2.5Y5/1：40 層） 0.2m、明黄灰色粘質土層（2.5Y6/6：44 層）の地山と続く。現代盛土下のオリーブ褐色泥砂と暗褐色泥砂層の 2 層は近・現代の耕作土とみられる。その下の黄灰色砂泥層は室町時代の整地層の可能性があり、この層の上面に室町時代から近世の遺構が成立している。今回の調査ではこの面を第 1 面として調査したが、室町時代の遺構は検出が困難で、第 2 面とした明黄灰色粘質土の上面（地山面）での検出となった。したがって、第 1 面で近世の遺構、第 2 面で室町時代の遺構の調査となった。さらに、同じく第 2 面で検出した平安から鎌倉時代の遺構は調査区の北東部に分布しており、この部分を第 3 面として図化している。

2. 第 1 面の遺構（図 5、図版 1）

第 1 面では近世の土坑群を検出した。多くは江戸時代の土採り土坑で、地山の明黄灰色粘質土を採取するためものと推測される。室町時代の遺構が存在する部分を避け、下層に存在する砂礫層の上面までが開削されている。水溜めあるいは肥溜めとみられる土坑もあり、埋め込まれた桶の竹製箍の一部が認められた。また、江戸時代後期の井戸とみられる遺構が 2 基あり、底部に石材が残っていたことから石組みを持っていたと推測される。

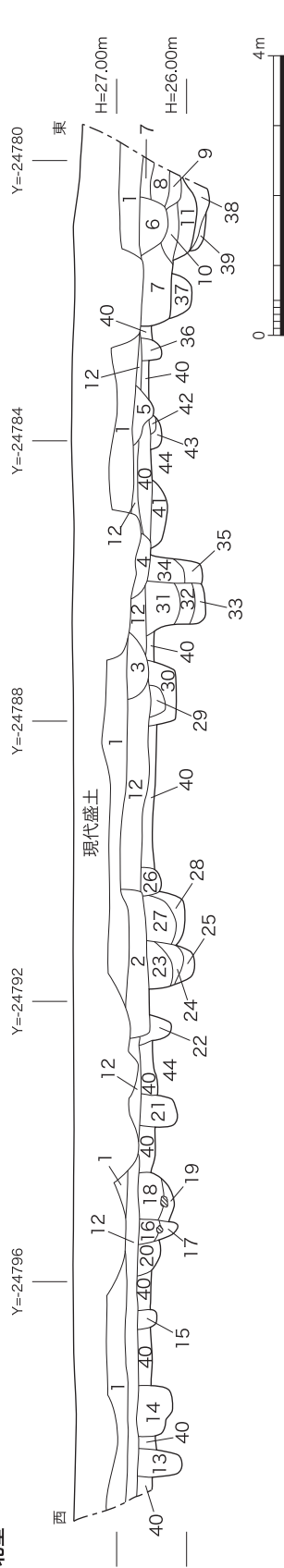
3. 第 2 面の遺構（図 6、図版 2）

第 2 面では調査区の北側で掘立柱建物のもと考えられる室町時代の柱穴を多数検出した。今回の調査では掘立柱建物 2 棟を復元することができた。調査区の南側では石組みの溝、調査区の北東部では宇多小路路面に開削された川を踏襲した溝も検出している。

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	柱穴211、溝101c、溝269	溝101cは宇多小路路面に開削された川、溝269は八町側の内溝
鎌倉時代	溝101b	溝101bは宇多小路西側溝
室町時代	建物 1、建物 2、溝501、土坑352、落込502、溝101a	建物1・2、溝501は西院城関連遺構
江戸時代	土坑群、井戸	

北壁

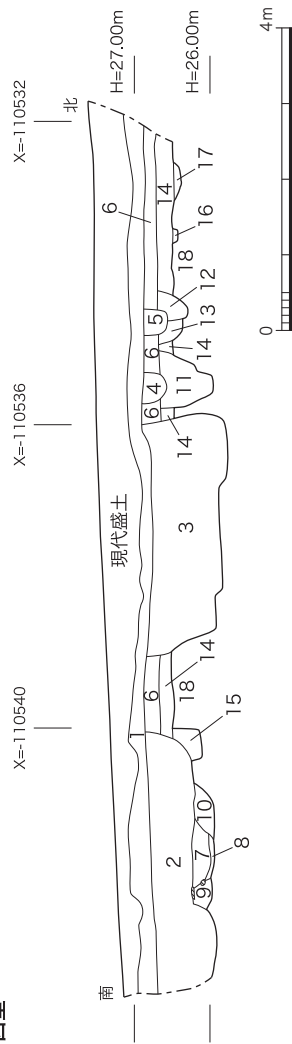


- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
- 7 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
- 8 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
- 9 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 礫混
- 10 5GY4/1 暗緑灰色泥土 礫混
- 11 5Y3/1 オリーブ黒色泥土 礫混
- 12 10YR3/3 暗褐色泥砂
- 13 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥+2.5Y6/6 明黄褐色粘土ブロック混
- 14 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥+2.5Y6/6 明黄褐色粘土ブロック混
- 15 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥

- 16 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
- 17 2.5Y4/1 黄灰色泥土
- 18 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
- 19 2.5Y3/2 黒褐色泥土
- 20 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
- 21 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 22 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
- 23 2.5Y3/1 黒褐色泥土
- 24 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 25 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
- 26 5Y4/3 暗オリーブ褐色砂泥
- 27 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥
- 28 2.5Y5/4 黄褐色砂泥
- 29 7.5GY5/1 緑灰色泥土
- 30 2.5Y3/1 黒褐色腐植土

- 31 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥+2.5Y6/6 明黄褐色粘土ブロック混 (土坑352)
- 32 10G4/1 暗緑灰色泥土
- 33 10YR3/3 暗褐色泥砂
- 34 10YR4/1 褐灰色砂泥
- 35 10YR3/1 黒褐色砂泥
- 36 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
- 37 10YR4/1 褐灰色砂泥(溝101b)
- 38 10YR3/1 黒褐色泥土 礫混
- 39 10YR3/1 黒褐色泥土 (溝101c)
- 40 2.5Y5/1 黄灰色泥砂
- 41 10YR3/4 暗褐色砂泥(溝269)
- 42 10YR3/3 暗褐色泥砂
- 43 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥
- 44 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土(地山)

西壁



- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂
- 2 10YR2/2 黒褐色砂泥 礫混
- 3 10YR4/2 灰黄褐色泥土
- 4 7.5YR3/2 黒褐色砂泥
- 5 7.5YR3/2 黒褐色砂泥
- 6 10YR3/3 暗褐色泥砂
- 7 10YR3/3 暗褐色泥砂
- 8 10YR4/4 褐色泥砂 (溝501埋土)
- 9 10YR4/1 褐灰色砂泥+10YR5/3 にぶい黄褐色粘土ブロック混 (溝501堀方)
- 10 10YR3/2 黒褐色泥土
- 11 10YR4/1 褐灰色砂泥
- 12 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 13 7.5YR3/2 黒褐色砂泥
- 14 2.5Y5/1 黄灰色泥砂
- 15 10YR3/1 黒褐色砂泥
- 16 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 17 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 18 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土(地山)

図4 北壁・西壁断面図(1:100)

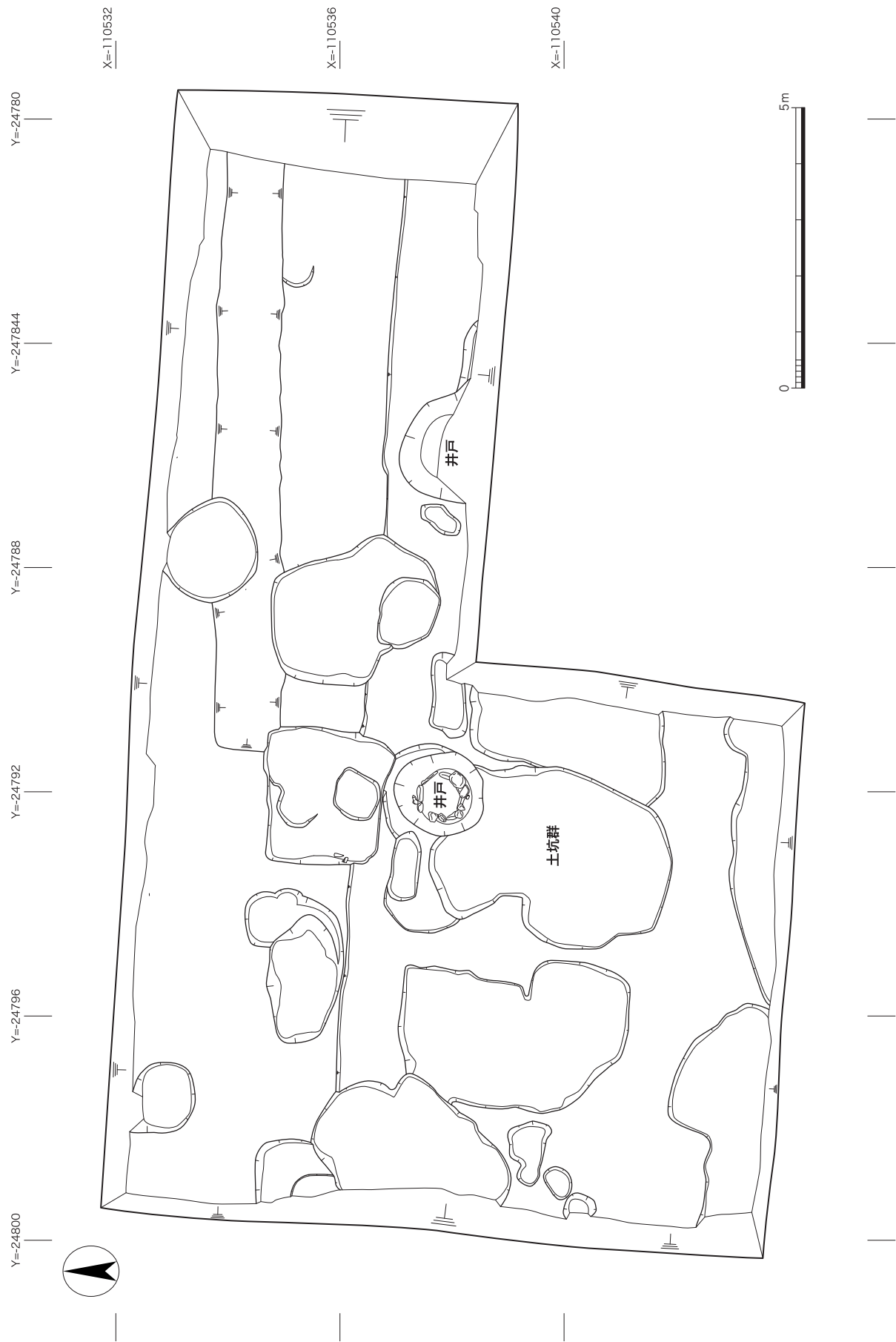


图5 第1面平面图(1:100)

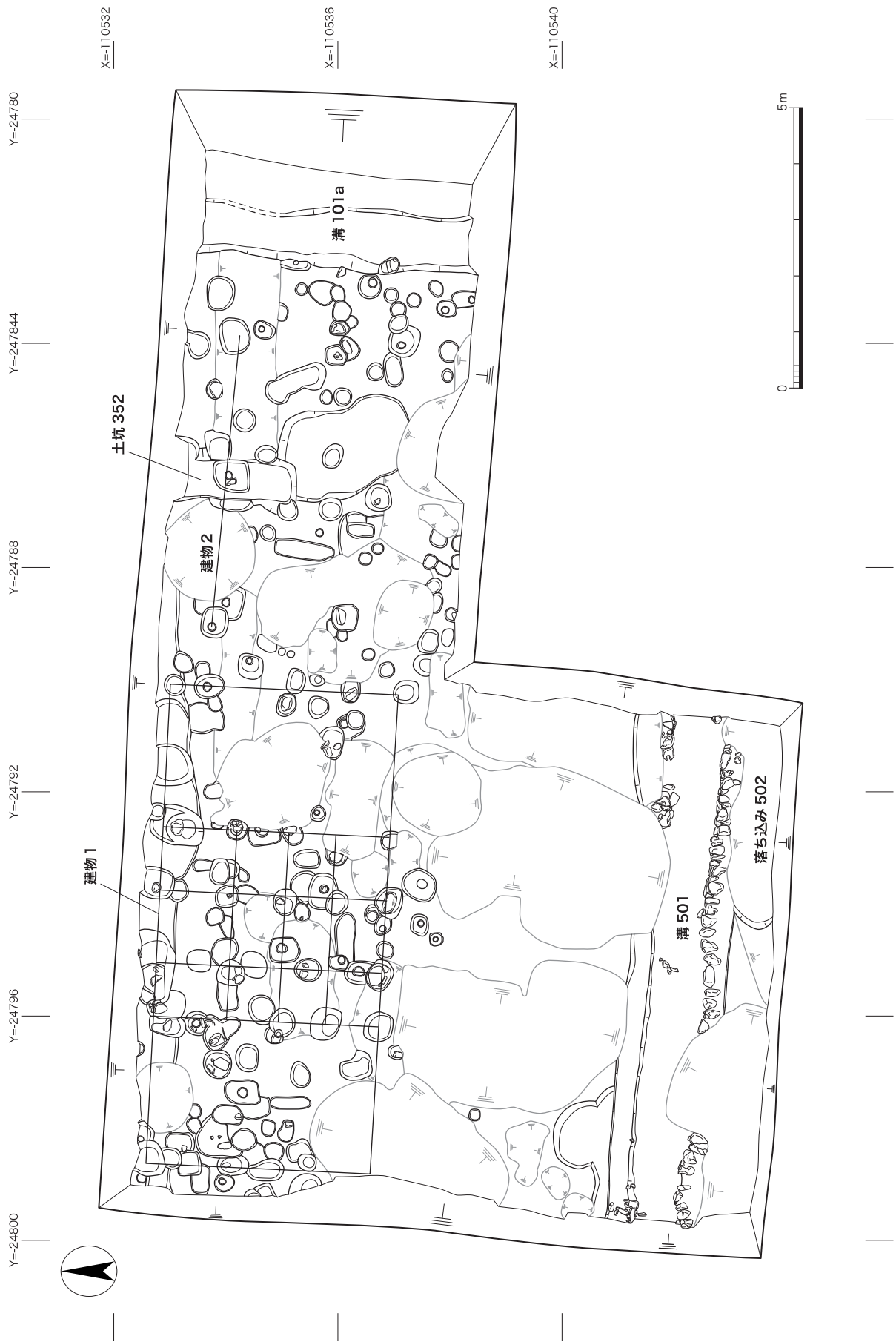


図6 第2面平面図(1:100)

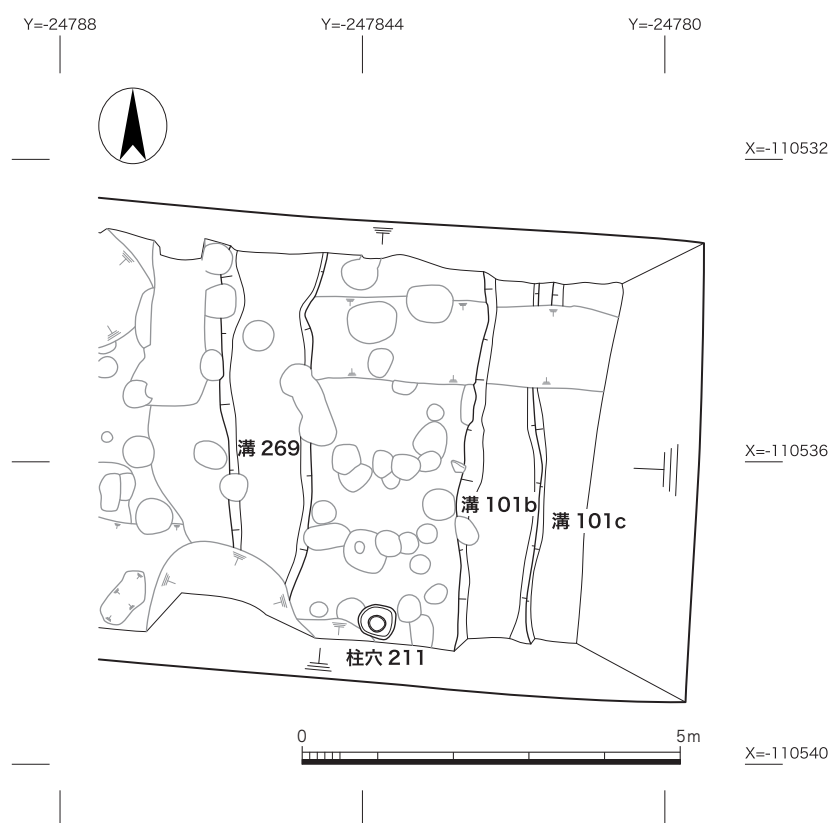


図7 第3面平面図(1:100)

建物1 (図8) 調査区の北西部で検出した掘立柱建物である。東西約8.3m、南北4mの規模と推測されるが、北と西は調査区外に延びる可能性がある。中央部は東西3間(3.3m)、南北4間(4m)の総柱、その東西に東西2間(2.5m)、南北4間(4m)の部屋が付属する建物として復元した。中央部の総柱部分の柱を床束ととらえ、中央部が床張り、東西の二間が土間で構成された建物であると考えられる。なお、建物南側柱列中央の間を形成する柱穴324と278には0.4mを超える大型の地下式礎石が据えられており、この間が玄関口になると推測される。

柱穴の多くは直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.6mと不揃いで、地下式礎石を持つもの、柱を押さえるために柱の周辺に石を入れたものがある。柱根の残るものもあり、柱は径0.1～0.15mの面取りをした丸材で筏穴を残している。建物の柱穴には重複するものが多数あり、1～2回の修復あるいは建て替えがあったものと考えられる。

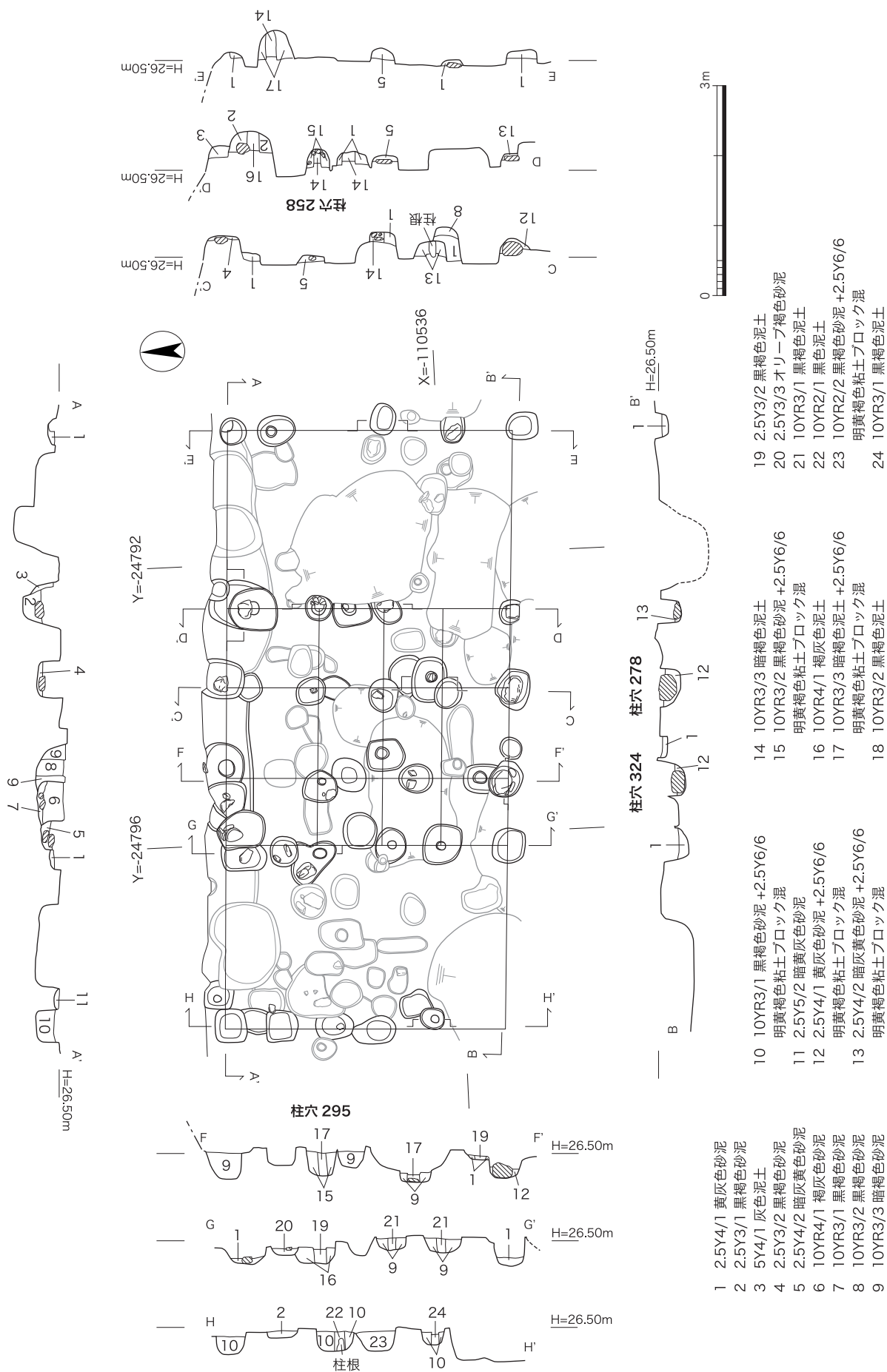


図8 建物1実測図(1:80)

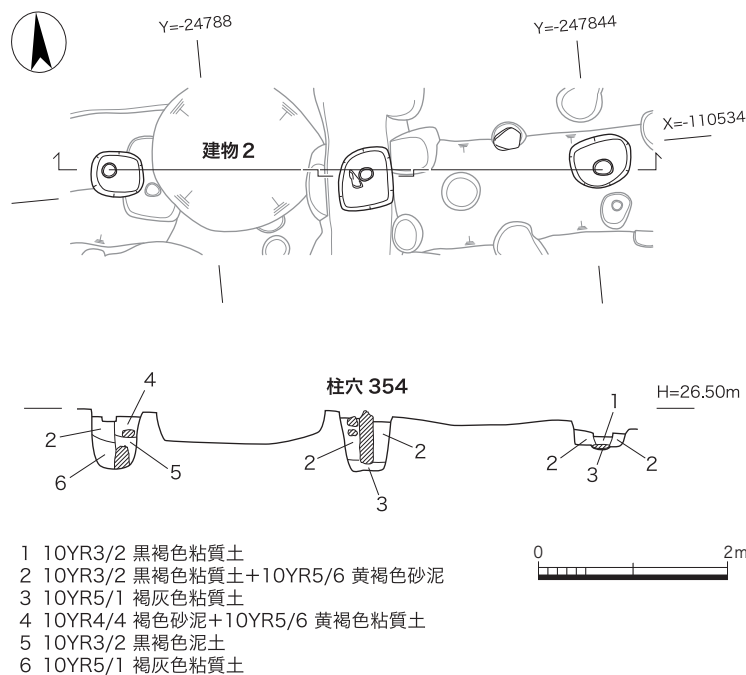


図9 建物2実測図(1:80)

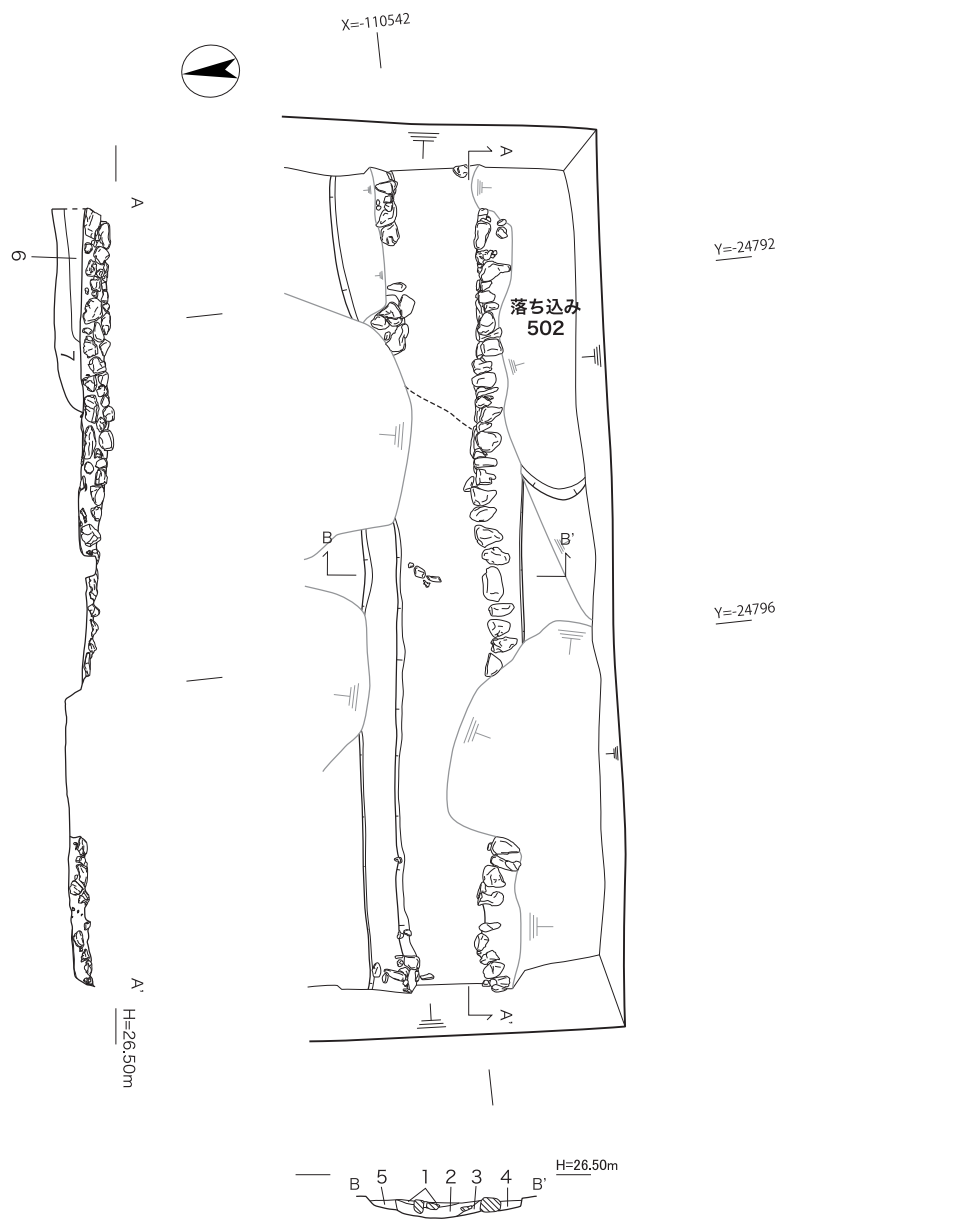
建物2 (図9) 調査区の東部で検出した掘立柱建物である。東西2間(4.8m)を検出した。建物は調査区北側に延びるものと考えられる。柱穴は1辺0.5mの隅丸方形で、深さは0.25～0.6mである。柱根の残るものがあり、径0.15mで面取りをした丸材である。地下式礎石を持つものもある。重複する柱穴もあり、補修あるいは建て替えがあった可能性がある。

溝501(図4・10) 調査区の南部で検出した石組み溝である。掘方の幅1.8m、溝の内法0.8m、深さ0.3mで、東西9mにわたって検出した。北岸の西部には石組みが認められず、杭の跡があることから板材等で護岸されていた可能性がある。石材は人頭大の川原石で、基本的に小口を内側に向けており、最大で3段の積み上げが認められる。溝の埋土は黒褐色泥土で下層に褐色泥砂層が部分的に認められる。埋土からは室町時代の土器類や下駄などの木製品、漆器などが出土している。

溝101a(図4) 調査区の東部で選出した南北溝である。幅1.8m以上、深さ1.0mを測る。西側は浅く東側に向かって一段深くなっている。この溝は平安時代の宇多小路の西側溝と路面に開削された宇多小路川を踏襲したものである。埋土から室町時代の陶器が出土している。

土坑352(図4・11) 調査区の北部で検出した土坑である。幅0.7m、深さ0.6m、南北2.2m以上の箱型の土坑でさらに調査区外の北側に延びる。底部に部分的に腐植土層が堆積している。建物2と重複しており、建物2より古い。

落ち込み502(図10) 調査区の南部、溝501の下層で検出した落ち込みである。東西2.0m、南北3.0m以上で、調査区の南東側へさらに広がる。埋土は褐灰色粗砂(10YR4/1)と灰色微砂(5Y4/1)からなり、その堆積状況から地下水を自噴する泉の可能性がある。溝501はこの落ち込



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 (溝埋土)
- 2 10YR2/2 黒褐色泥土 (溝埋土)
- 3 10YR4/4 褐色泥砂
- 4 10YR4/1 褐灰色砂泥 + 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土ブロック混 (溝掘形)
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 + 砂礫混 (溝北肩部)
- 6 10YR4/1 褐灰色粗砂 (落ち込み 502)
- 7 5Y4/1 灰色微砂 (落ち込み 502)

図 10 溝 501実測図(1:80)

みを埋め立てて構築している。

4. 第3面の遺構（図7、図版3-1）

第3面の遺構は調査区の北東部でのみ確認している。鎌倉時代以前の遺構は近世の土採り土坑と室町時代の柱穴群によって壊されているとみられる。

溝 101b（図4） 上面を中世の溝 101a によって削平されているが、幅 1.0m、深さ 0.4m の規模と推測される。南北 5.5m にわたって検出した。溝の西肩が宇多小路の西築地推定ラインから東に 1.0m 付近に位置することから、宇多小路の西側溝であると考えられる。溝の埋土から鎌倉時代の土器が出土している。

溝 101c（図4） 上面を中世の溝 101a によって削平されているが、幅 1.0m、深さ 0.5m の規模と推測される。南北 5.5 m にわたって検出した。宇多小路の路面に相当する場所にあたり、右京域の排水を補うために開削された川であると推測される。埋土から平安時代後期の土器が出土している。

溝 269（図4） 幅 1.0m、深さ 0.25m で南北 4.3m にわたって検出しており、南端は近世の井戸に削平されている。溝の東肩が宇多小路の西築地推定ラインから西に 1.3m 付近に位置することから、八町の宅地内溝であると考えられる。

柱穴 211 溝 101b と溝 269 の中間で検出した柱穴である。径 0.5m、深さ 0.2m、柱痕跡の径 0.15m である。ほぼ宇多小路の西築地推定ライン上に位置することから、築地に関連した柱穴と考えられる。柱痕跡部分から平安時代後期の土器が出土している。

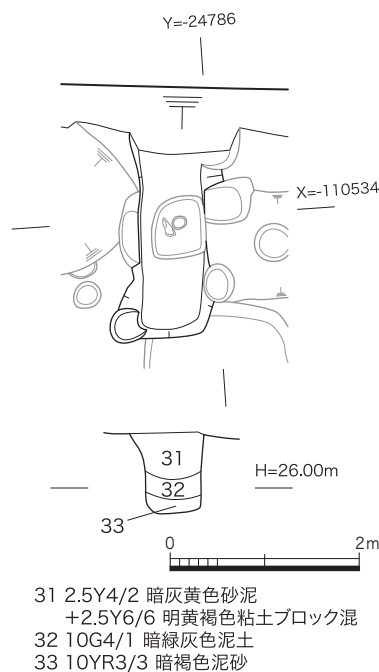


図 11 土坑 352 実測図(1:80)

第IV章 遺物

今回の調査では平安時代から江戸時代の遺物が出土している。土器・陶磁器類、瓦類、木製品、漆器、石製品、銭貨などがある。土器・陶磁器に関しては室町時代の土師器（皿）の出土量が少なく、焼締陶器類が多いのが目立つ。また瓦類も少ないが、その中で室町時代の丸瓦の出土がやや多い傾向にある。

1. 土器類（図 12、図版 9・10）

土器類には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、青磁、染付磁器などがあり、平安時代から江戸時代までのものがある。ここでは、各時代の遺構に関連した土器類を中心に述べる。

溝 501 出土土器（1～14）1 は土師器の皿 Sb、2 は土師器の皿 S である。口縁部の外面は上部に一段のナデを施す。10B 段階のものである。3 は「ツボツボ」呼ばれる土師器の小壺である。手づくねで成形されている。4・5 は鉄釉皿で茶褐色の鉄釉が底部裏面を除いて厚く施されている。6 は天目碗で内面から外面の上半にかけて茶褐色の釉が厚く施されている。7 は灰釉碗、8 は灰釉皿の底部である。共に内外面にガラス質の釉薬が厚く施されている。底部裏面には輪状トチンの跡が認められる。以上 4～8 は瀬戸・美濃大窯期の製品である。9 は焼締陶器の擂鉢で上方に立ち上がる縁部をもち、内面には櫛状工具で施された摺り目が間隔をあけて施されている。丹波の製品である。10 は焼締陶器の擂鉢で口縁端部は上方に立ち上がり外面に帯状の面を持つ。内面には櫛状工具で施された摺り目が間隔をあけて施されている。備前の製品である。11 はいわゆる茶壺の口縁部で、垂直に立ちあがる口縁の端部は外面に折り返されて玉縁を呈している。外面には薄く鉄釉が施されている。瀬戸・美濃大窯期の製品である。12 は焼締陶器、甕の口縁部で外側に折り返されて大きな玉縁を形成している。備前の製品である。13・14 は焼締陶器の擂鉢である。体部は斜め上方に広がり、口縁端部は外方につまみ出されて丸みを帯びる。体部内面には櫛状の工具で施された摺り目が間隔をあけて施されており、下半部は使用によってすり減っている。共に信楽の製品である。以上は室町時代後期の遺物である。

建物 1（柱穴 295）出土土器（15）15 は焼締陶器の擂鉢である。口縁部上面は水平に成形されている。内面にへう描き 1 本線の摺り目が間隔をあけて施されている。口縁部には 2 次焼成を受けた痕跡が残っている。9 段階、信楽の製品である。

溝 101a 出土土器（16）16 は焼締陶器、甕の口縁部である。口縁部は折り返されて「N 字」状を呈している。外面にはゴマ状の自然釉がかかっている。9 段階、信楽の製品である。

柱穴 204 出土土器（17）17 は土師器の皿 A である。口縁部は屈曲し、いわゆる「ての字」状を呈する。5A 段階、平安時代後期の土師器である。

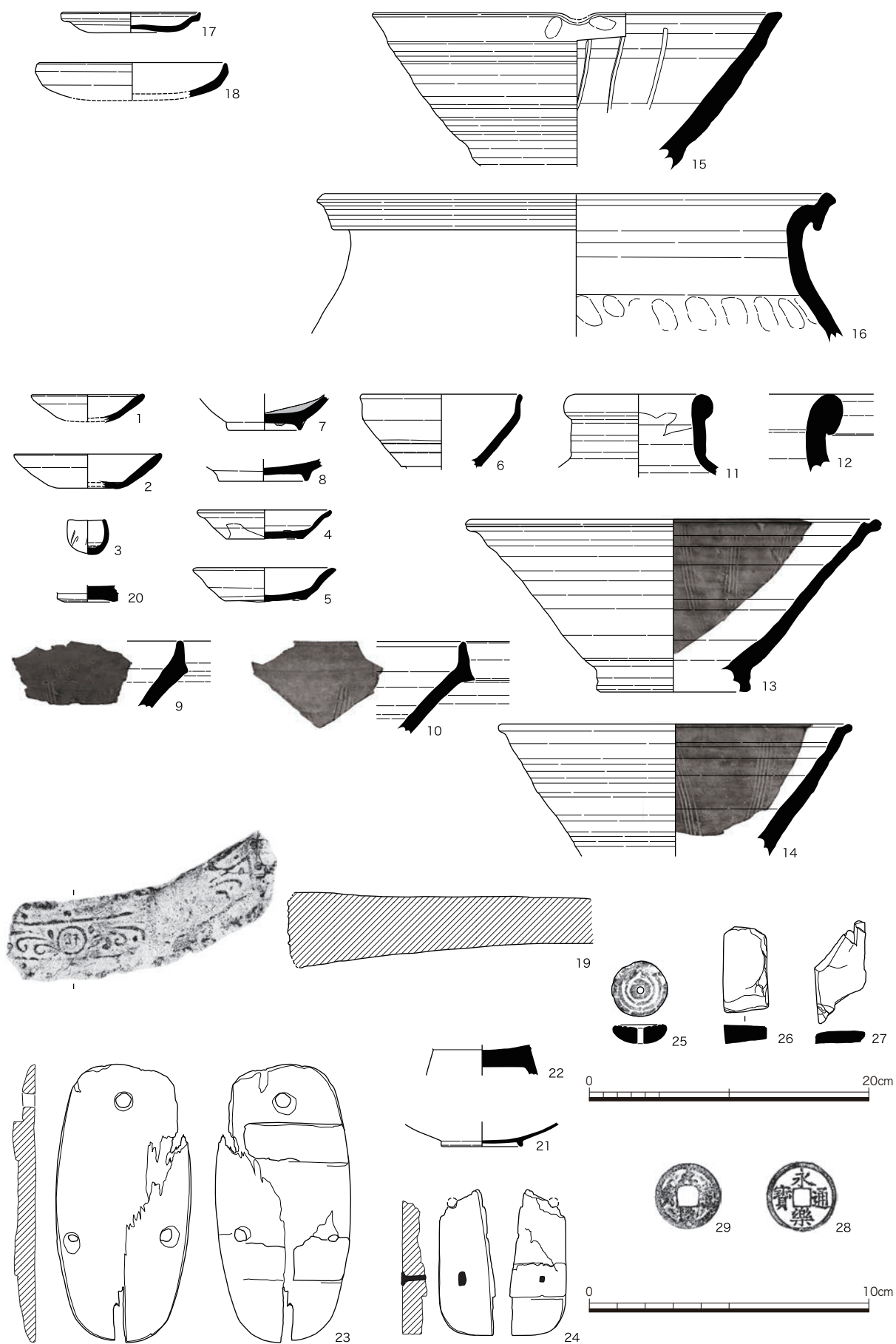


图 12 遺物実測図(1:4)、錢貨拓影(1:2)

溝 101c 出土土器 (18) 18 は土師器の皿 N である。口縁部は内湾し、2 段にナデが施されている。5A 段階、平安時代後期の土師器である。

2. 瓦類 (図 12、図版 11)

19 は均整唐草文軒平瓦で中心飾は円弧の中に「松」の鏡文字を現している。中央から外側へ三葉一組の唐草が 3 転する。外区の珠文は間隔が広く、向かって右側の瓦当端部に范傷が認められる。顎部は曲線顎である。胎土は砂粒が多く、やや軟質である。溝 269 から出土している。長岡京からの搬入瓦と考えられ、同文と考えられる瓦が平安京右京六条二坊の調査 SE32 から出土している (註 1)。

3. 土製品 (図 12、図版 11)

土製品 20 は天目茶碗底部の周囲を打ち欠いて円盤状に仕上げたものである。遊具の一種と考えられるが用途は不明である。直径 4.3cm、厚さ 1.1cm、重量 37g。溝 501 から出土している。

4. 木製品 (図 12、図版 11)

漆器、下駄がある。21 は漆器の椀で、高台から体部下部が残存している。器壁は薄く、全体に黒漆を施した後に底部裏面を残して朱漆を施す。底部裏面には「エ」銘の朱書きがある。全体に丁寧な仕上りの製品である。22 は漆器椀の底部である。漆は剥落し木地のみが残存する。低く厚手の高台である。

23・24 は下駄である。23 の台は楕円形を呈し、前方の眼は中央に、後ろの眼は左右ほぼ均等な位置に開いている。歯は台と一体型で、使用によってかなり摩滅している。全長 19.9cm、最大幅 9.7cm とやや小型である。24 は下駄の左後端部である。台の角は丸みを帯びており、眼の一部が残存している。歯と台は一体型であるが台の上面から鉄くぎを打ち込んで補強している。以上は溝 501 から出土している。

5. 石製品 (図 12、図版 11)

紡錘車と砥石がある。25 は紡錘車で半球状を呈する。上面は円周を階段状に彫り窪め中央に軸を通す孔を穿っている。裏面は周囲に筋状の線が数本施されている。直径 4.0cm、高さ 1.3cm、中央の孔の径 0.5cm、重量 30.5g である。近世土坑から出土しており、混入と思われるが時期は不明である。

26・27 は砥石である。26 は粘板岩製で一側辺と上面のみが残存している。上面は使用によって研磨されている。27 は頁岩製で下方が欠損している。幅 3.0cm、厚さ 1.0cm である。上・下面は使用によって研磨されている。溝 501 から出土している。

6. 金属製品 (図 12、図版 11)

金属製品としては銭貨が 2 点出土している。28 は永楽通宝で、直径 2.5cm、重量 3.2g である。

溝 501 から出土している。29 は錆化が激しいが元豊通宝と思われる。直径 3.1cm、重量 2.1g である。建物 1 の柱穴 295 から出土している。

註 1 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所「平安京右京六条二坊(1)」『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1993 年。

表 2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	A ランク点数	B ランク 箱数	C ランク 箱数
奈良時代	瓦		軒平瓦 1 点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器		土師器 2 点		
鎌倉時代	土師器、瓦器				
室町時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、青磁、土製品、瓦、木製品、石製品、銭貨		土師器 3 点、施釉陶器 5 点、焼締陶器 8 点、土製品 1 点、木製品 4 点、石製品 2 点、銭貨 1 点		
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付磁器、瓦				
不 明	石製品、銭貨		石製品 1 点、銭貨 1 点		
合 計		8 箱	29 点 (2 箱)	0 箱	6 箱

※ A ランクを選出したため当初より箱数が増加している。

第V章 まとめ

今回の調査では、先述したように第1面で近世の土坑群、第2面で室町時代の建物や溝、第3面で平安時代から鎌倉時代にかけての宇多小路に関する遺構を検出した。

近世の遺構 近世の遺構の多くは土採り土坑である。土坑からは江戸時代中期から後期の遺物が出土していることから、江戸時代には土を採取できる空閑地が広がっていたと考えられる。ただ土坑の中には桶を埋め込んだ水溜めあるいは肥溜めと考えられるものが存在し、耕作土とみられる土層の堆積が認められることから、この空閑地は田畑であった可能性が高い。農作物を育てる一方、農閑期には地山の明黄灰色粘質土を掘り出してして利用していたものと推測される。この土は上京周辺に分布するいわゆる「聚楽土」と呼ばれる良質な粘土には及ばないが、瓦の下地や壁土などの建築材料となりうる土である。また、江戸時代後期には、調査区の東部に井戸跡などが認められるので民家が築造され始めたと考えられる。

室町時代の遺構 掘立柱建物、石組み溝などを検出した。掘立柱建物1・2、溝501 溝101aからはいずれも室町時代後期の遺物が出土しており、方位もそろっていることから一連の遺構群と考えられる。この中で建物1は床張りの中央間の左右に土間を配置する建物で、柱穴に大型の地下式礎石を用いるなど掘立柱建物としては特異な構造である。また、その南側には石組みの溝501なども配置されている。こうした状況は一般の民家に伴う遺構とはとらえにくい。当地は室町時代後期に存在したとされる西院城（小泉城）跡に比定されていることから、第2面の遺構群は西院城に関連するものとするのが妥当であろう。

西院城に関する文献資料はいくつかあるものの、建物の配置や構造を読み取れるものは『上杉本 洛中洛外図屏風』にある「さいのしろ」と注記のある絵画（図13）（註1）のみである。ここに描かれた城の多くの部分は金雲に隠されているが、城の四周には塀を巡らせ、内部には板葺と

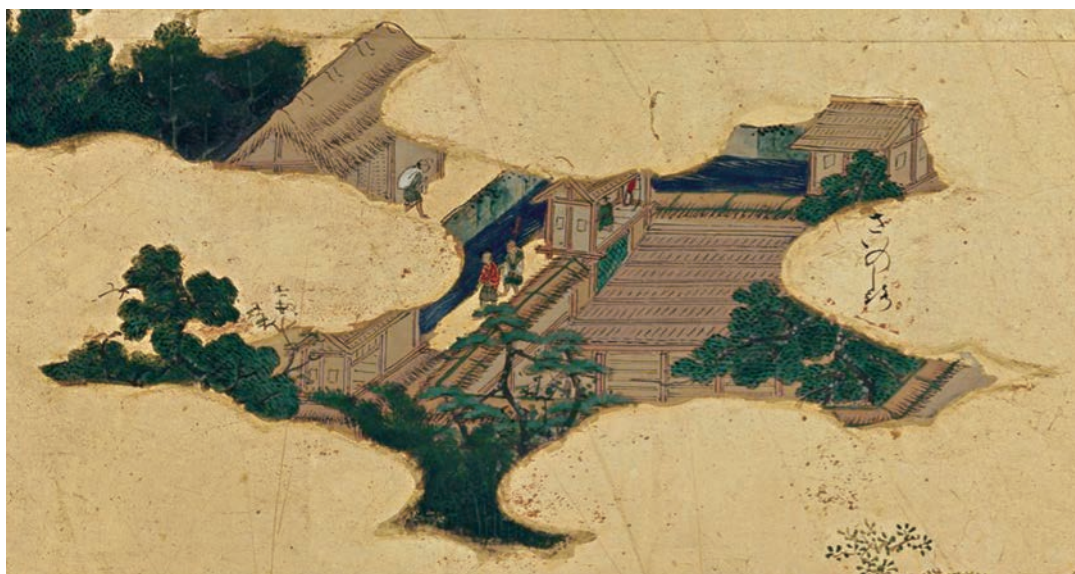


図13 上杉本洛中洛外図屏風(さいのしろ部分)

見られる建物が配置されている。楼門となっている南門の内部には弓が備えられ、武士と思われる人物立っているのが見て取れる。また、城の南東隅及び北西隅には櫓があり、南や西側にも堀あるいは川らしきものが描かれている。

この中で注目できるのは、建物の屋根がいずれも板葺と見られる点である。図絵からは建物の地下構造を知ることはできないが、屋根の軽い板葺建物であるならば地下構造が掘立柱でもおかしくはない。この点、今回検出した建物1と図絵の建物の表現とは矛盾しない。また宇多小路川を踏襲した溝101aも城構えとしての堀と考えればこれも図絵の表現と矛盾しない。裏を返せば、「さいのしろ」はデフォルメされているが西院城の実態をとらえた表現がなされているのではないだろうか。また、出土遺物の中に大振りの丸瓦が目につくが、これは屋根の棟を押さえる瓦として使われていた可能性が考えられる。なお、溝501は城内を区画する溝であると考えられる。同様の石積み溝は山科本願寺跡にも見られ、石積みに川原石を用いている点が共通している(註2)。

ところで今回の調査では室町時代の出土遺物に特異な点がある。通常、中世の京都では土師器の皿は使い捨てにされることが多く、発掘調査では土師器の皿が大量に出土する。しかしながら今回調査では土師器の皿の出土は少なく、代わりに焼締陶器の播鉢の出土が目立っている。とくに、備前と信楽産のことが多い。今回検出した建物の周辺では播鉢を多用する何らかの作業が行われていたのであろうか。

平安から鎌倉時代の遺構 今回は宇多小路に関連する遺構を確認した。築地関連と思われる(柱穴211)、西側溝(溝101b)、八町側の内溝(溝269)、路面に開削された宇多小路川(溝101c)である。

この内、柱穴211・溝269・溝101cからは平安時代後期、溝101bは鎌倉時代の遺物が出土している。この状況から付近では平安時代後期頃まで条坊が維持されていたと考えられる。

検出できた条坊関連の遺構を平安京の復元モデル(註3)と比較すると、ちょうど調査区の中央部分が四行八間の一門と二門の境にあたり、その座標が(X-110536.02・Y-24783.33)である。今回検出した築地関連と推測される柱穴(柱穴211)の中心座標が(X-110538.15・Y-24783.70)なので柱穴は東に0.37mずれて検出されたことになる。

次に延喜式(註3)の規定にある小路の規模と検出した遺構を比較してみよう。宇多小路は小路であるので築地基底部の幅は5尺(約1.5m)、犬走幅3尺(約0.9m)、側溝幅3尺(0.9m)である。側溝の規模に関しては溝101bの幅は約1.0mでほぼ一致している。犬走と築地に関しては、仮に柱穴211が築地の中心としてみると、築地基底部は半分の2.5尺(0.75m)、犬走3尺(0.9m)、つまり築地中心から側溝の西肩までの距離が1.65mである。実際には柱穴211から溝101bまでの距離は1.1mである。若干の差はあるもののこの程度は施工の誤差の範囲ととらえて問題なかろう。つまり、ここでは延喜式の規定通り条坊が施工されているととらえられる。

今回の調査では西院城関連の遺構を検出することができた。これまで西院城に関する情報は文献や屏風絵が頼りで、その情報も断片的であった。そこに具体的な遺構の情報を加えることができたことの意義は大きい。この調査を起点にして西院城の調査が進展することを期待したい。

また、今回の成果から文献や絵画資料の再検討も必要となろう。

註1 『上杉本 洛中洛外図屏風』伝国の社・米沢市上杉博物館所蔵(部分)

伝国の社・米沢市上杉博物館所蔵の許可を得て掲載

註2 ・京都市文化市民局・(財)京都市埋蔵文化財研究所「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査外報 昭和62年度』1988年

・京都市文化市民局「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査外報 昭和63年度』1989年

・京都市文化市民局「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査外報 平成元年度』1990年

註3 『平安京復元モデル』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が作成した平安京の復元モデルデータ

【参考文献】

- ・京都府教育庁指導部文化財保護課編「西院(小泉)城跡」『京都府中世城館跡調査報告書 第3冊』2014年
- ・竹井英文・中澤克昭・新谷和之編『描かれた中世城郭一城絵図・屏風・絵巻物一』吉川弘文館 2023年

図 版



1. 第1面オルソ画像（俯瞰）



1. 第2面オルソ画像（俯瞰）



1. 第3面オルソ画像（俯瞰）



2. 1区第1面全景（西から）



1. 1区第2面全景（西から）



2. 建物1（南から）



1. 建物1 柱穴324〔左〕と柱穴278〔右〕（南から）



2. 建物2 柱穴354断面（北から）



3. 建物1 柱穴258断面（東から）



1. 建物2（東から）



2. 土坑352（北から）



3. 溝101a～c（南から）



1. 2区第1・2面全景（西から）



2. 溝501（北東から）



1. 落ち込み502（北から）



2. 1区第3面宇多小路関連遺構群（北から）



1



3



2



4



5



6

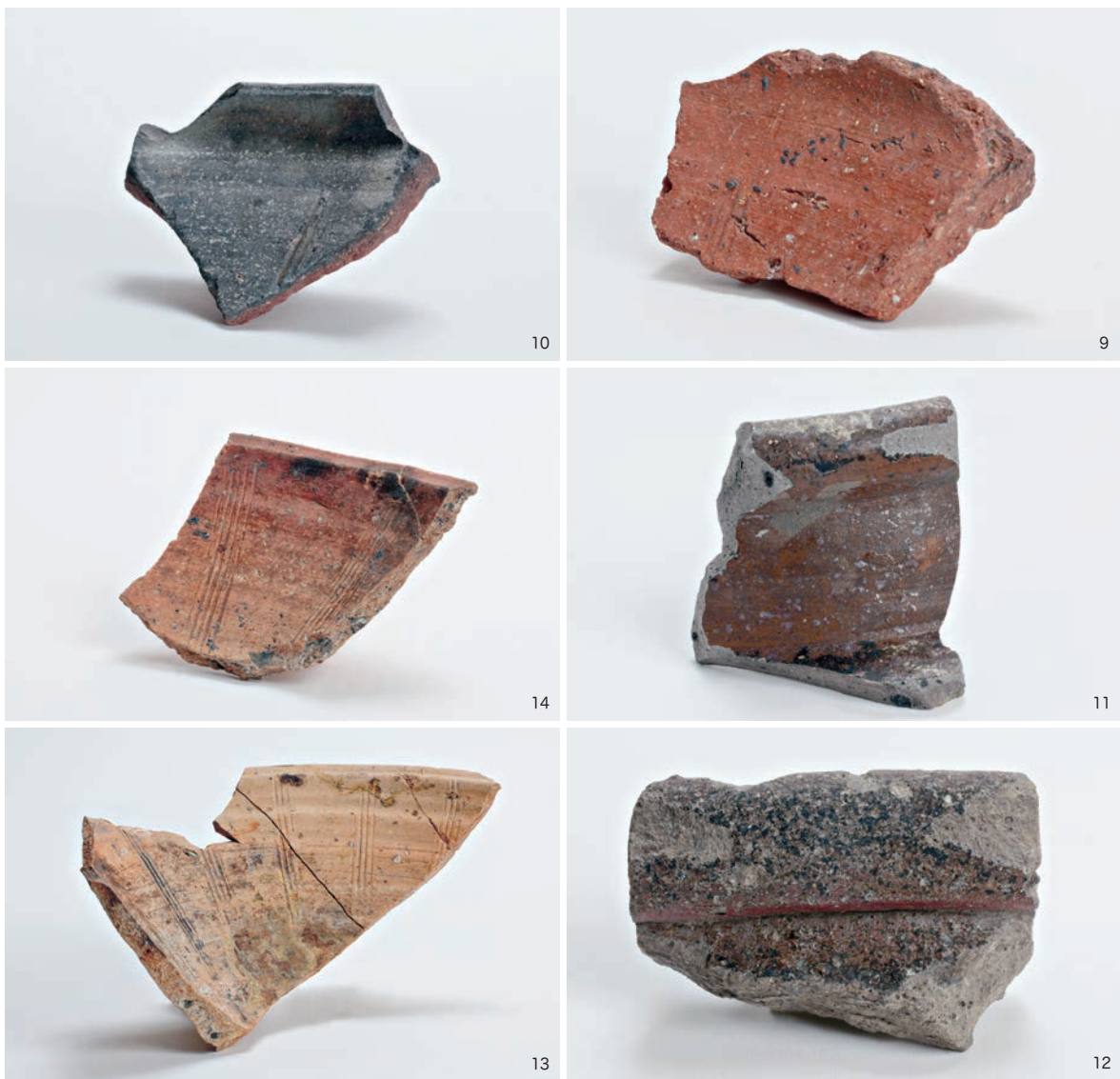


7



8

1. 溝501出土土器



1. 溝501出土土器



2. 各遺構出土土器



1. 瓦・木製品・土製品・石製品・金属製品

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうごじょうさんぼうはっちょうあと・さいいんじょうあとこいづみじょうはつつちょうさほうこくしよ							
書 籍	平安京右京五条三坊八町跡・西院城跡(小泉城)発掘調査報告書							
シリーズ名	特定非営利活動法人平安京調査会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 5 集							
編著者名	吉崎 伸							
編集機関	特定非営利活動法人平安京調査会							
所在地	〒603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号							
発行所	特定非営利活動法人平安京調査会							
発行年月日	2025 年 2 月 28 日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京右京五条三坊八町跡・西院城跡(小泉城)	京都市右京区西院異町 22 番地	26100	1・933	35 度 00 分 12 秒	135 度 43 分 42 秒	2024 年 11 月 18 日 ～ 12 月 17 日	180 m ²	共同住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京五条三坊八町跡・西院城跡(小泉城)	都城跡 城跡	平安時代～ 鎌倉時代	道路側溝・内溝・ 溝	土師器		宇多小路の西側溝、宇多小路路面に掘削された川を検出した。西院城に関連する建物・石組み溝を検出した。		
		室町時代	掘立柱建物・ 石組み溝	土師器・焼締陶器 ・施釉陶器・木製品				
		江戸時代	土坑					

平安京右京五条三坊八町跡・西院城跡 (小泉城)発掘調査報告書

編集・発行 特定非営利活動法人平安京調査会
〒 603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号
TEL 075-334-5680
<https://heiankyo-tyousakai.com>
コンピューター・システム株式会社
〒 602-8453 京都市上京区笹屋町4丁目273番3
TEL 075-462-5411
<https://www.comsys-kk.co.jp>

発行日 2025年2月28日

